2022年1月25日
季刊 年4回（1, 4, 7, 10月）発行

支え合い、備え、いのちをつなぐ 第38号

震災リゲイン Pressプレス

震災復興・防災情報専門メディア 全国4万部配布
発行元：特定非営利活動法人 震災リゲイン
発行人：相澤久美 編集人：内田伸一

編集部：〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6 Tel：03-3584-3430 Fax：03-3560-2047

第38号 復興と自立の志

2面 ● みちのく潮風トレイルを歩く

3面 ● 災害教育を知る旅
● 3.11伝承ロードを訪ねて

4面 ● 民間主体の産業再生を考える本
● 災害支援の現場から

女川の朝日を見つめ続けて

2011年の東日本大震災以降、各地でふるさとの再建に携わってきた人々がいます。
今回は宮城県女川町の阿部喜英さんに、同町での民間の取り組みを伺いました。

文＝内田伸一
イラスト＝飯川雄大
写真＝阿部喜英

震災後、先行世代から受け取ったまちづくりのバトン

宮城県牡鹿郡の女川町。梅丸新聞店代表の阿部喜英さんは毎朝の配達の後、駅から海へ伸びるレンガみちの風景をよく写真に収めます。朝日が町を照らし始める、夜明けの時間帯です。レンガみち沿いの商業施設・シーパルピア女川は2015年、物産施設・ハマテラスは2016年開業。阿部さんはその実現を含め、震災後の女川のまちづくりを民間側から牽引した一人です。

「震災のひと月後、町の産業従事者が垣根を超え復興を目指す『女川町復興連絡協議会(FRK)』が発足しました。当時の商工会長の発案でしたが、最初の会合で、この復興は20年先を見据える必要があるから若い世代に任せよう、還暦を過ぎた世代は口を出さずに見守ろう、と仰いました。当時40代前半だった私も『まちづくり創造委員会』の委員長を拝命しました」

戸惑いもあったそうですが、阿部さんは以前から商工会青年部で町を元気にする活動もしていました。

「それまでは町をPRするCMや、ご当地ヒーロー『リアスの戦士イーガー』の企画など、観光客を増やすことを主に考えていました。ただ、FRK以降の活動では、自分の中で考え方も変わっていったと思います」

被災後に休業していた商業主らと協力した青空市場「おながわ復興市」の開催や、コンテナを活用した民設民営の仮設商店街開設など、阿部さんたちは町の暮らしと経済を再生する取り組みを続けました。役場と連携しつつ、民間の動きが大きな役割を果たしたのは特徴的です。

「続いて開業した『きぼうのかね商店街』は50店舗の大型仮設商店街で、民間団体からいただいた大きな寄付と、公的支援の両方で実現しました。公的支援では入居対象店舗が被災事業者に限定されますが、ここでは新たに起業した方々も対象にできため、創業支援的な役割もある程度果たせたのではと思います」

支えられ、学びつつ、自立した町への道を目指す

お話から感じるのは、観光力向上や被災地復旧に留まらない、地方創生（少子高齢化等の課題に向き合いつつ、住みよく活力ある環境を築く）の眼差しです。

「私にとって、まちづくりの専門家・木下斉さんとの縁は大きかったです。知り合ったのは震災前で、補助金等に依存せず自立したまちづくりを重視する考え方に大きく影響を受けました。震災後も、国の支援をただ待つより、自力で動き出すよう助言をくれました。率直かつ厳しい人で、彼に怒られたくない一心で動いたこともありますが（苦笑）、とても感謝しています。

岩手県紫波郡の『オガールプロジェクト』にも多くを教えてもらいました。長く未活用だった駅前町有地を官民連携で活性化した取り組みです。ハコモノありきでなく、全テナントの誘致後に建物を設計し、テナント収入で維持管理費を賄う手法は参考になりました。公・民が得意領域で連携する形も女川町役場と一緒に学び、シーパルピア女川ほかの事業に活かせました」

現在、町も出資する女川みらい創造株式会社の代表として駅前商業エリアの運営等に携わる阿部さん。課題もまだ多いとしつつ、ただ消費する場ではなく、人が自然と集い、観光客も繰り返し訪ねてくれる魅力ある場を目指したいと語ってくれました。町には若い世代の動きもあり、「お試し移住」プログラムなども生まれているそうです。今朝もレンガみちに立つ阿部さんの前に、女川の新しい朝日が昇ります。

阿部喜英さん
女川みらい創造株式会社代表、
梅丸新聞店代表

連載 みちのく潮風トレイルを歩く 第4回

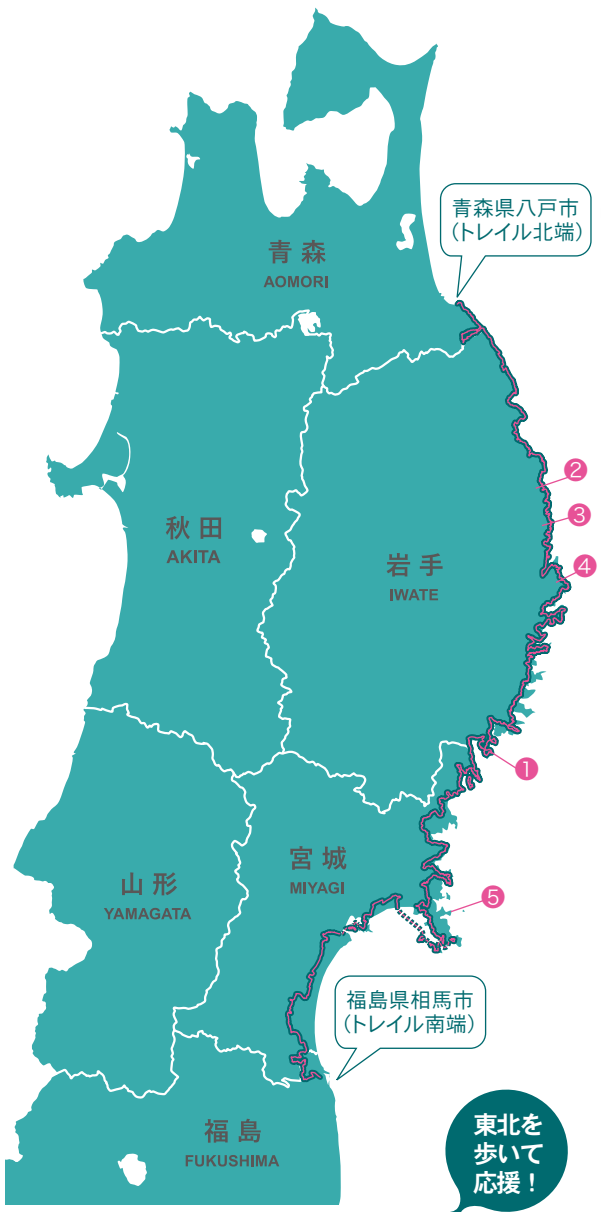
Walking on Michinoku Coastal Trail

「みちのく潮風トレイル（MCT）」は、2019年に誕生した長距離自然歩道／ロングトレイル。青森県八戸市から福島県相馬市まで東北太平洋沿岸の1,000キロ超に及ぶ、自然と町を繋ぎ「歩いて」旅をするための道です。東北の復興と振興を後押しするため環境省が敷設し、4県28市町村、市民が協働しています。次代への願いが込められたこの道は、どんな風に育っていくのでしょう？　実際に歩いたハイカーの声をお届けします。

❶夕方の広田半島（岩手県陸前高田市）

今回のハイカー
松野にこさん（東京都在住）
スタート：2020年9月29日 青森県八戸市（北のターミナス（北端））
ゴール：2020年11月27日 福島県相馬市（南のターミナス（南端））
歩き方：スルーハイク（編注：全ルートを一度に歩き通すこと）。合計60日。
その後：東北「道の駅」公式サイト「まいにち・みちこ」で、トレイルを歩いたときのことを振り返る連載をしている。歩いているときに出会った人とたまに連絡を取っている。

みちのく潮風トレイル
MICHINOKU COASTAL TRAIL



東北を歩いて応援！

みちのく潮風トレイルを歩こう！
詳しくは▶NPO法人みちのくトレイルクラブ
https://m-tc.org/

❷道の脇が大きくえぐれている。台風の影響（岩手県田野畑村）

❸田老の堤防工事（岩手県宮古市）

❹重茂半島の寂しいくらいにきれいな海（岩手県宮古市）

❺もらったお昼ごはん。豪勢。（宮城県石巻市）

なぜ歩いたか

高校生の時に、大学の先生のお話を聞く機会があり、その時から自分の中の「自然」について考えるようになって、卒業後に「くりこま高原自然学校」へインターンに行きました。そこで約2か月半の間、何度も沢を歩き、森を歩き、今までになく自然と近い生活を送っているうちに「ここを一人で歩いたら自分は何を感じるのだろう？」という好奇心が湧いてきました。それがトレイルを歩こうと決めたきっかけです。

歩いている間に印象に残ったこと

人との出会いが印象に残っています。きっかけが「森の中を一人で歩いてみたい」だったこともあり、こんなに出会いの多い旅になるとは思っていませんでした。たぶん、大きなバックパックを背負って一人きりで歩いているのが目立つんだと思います。町中で話しかけてもらったり、軽トラから声をかけてもらったり、話が弾んでお昼ご飯にアワビをもらったこともありました。基本一人で歩いているから話しかけてもらえるだけで嬉しかったし、他にも色んな形で、たくさんの方にお世話になった旅でした。

歩き終わって何を想う

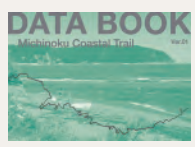
まず、一人で森を歩くのは怖い！そして、車道に出ると安心する。けれどあの自然との近さを、過度に恐れてはいけないんだと思います。海辺に暮らす方たちのお話からも感じたことなのですが、怖いからといって一方的に壁を作って人間と人工物だけの世界に閉じこもってしまったら、バランスがおかしくなってしまう。そして、屋根の下、壁の内側で寝られること、すぐそばの蛇口をひねれば水が出ること、食べ物重さを気にしないでいいこと…歩く前は当たり前すぎて意識に上りすらしなかった生活の中のありがたさを、生身の感覚を通して知った時間でもありました。

二つ目はトレイルそのものについて。歩くことが日常になった私と、日々の生活を営む地域の人がここでは一緒に存在していて、相手の日常が自分にとってはそうじゃないんですよね。地域の人から見たら私は大きなバックパックを背負った非日常の存在。地域の人にとっての地元は、私からすれば全てが新しい場所と人に出会う非日常でした。だからこそ、そこに会話が生まれて、震災のことも含め、色んな人から色んなお話を聞けたんだと思います。東北、また行きたいな。

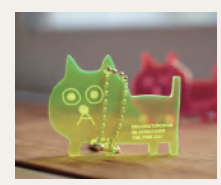
読者プレゼント

以下ご記載のうえ、右ページ下に記載の編集部宛（ハガキ／Fax／E-mail）にてご応募ください。
①希望プレゼント（A～Bのいずれか）　②郵便番号・住所・名前・電話・性別・年齢　③よかった記事　④ご感想・ご意見　⑤本紙をどこで手に取りましたか？

A　みちのく潮風トレイルData Book 3名
提供：NPO法人みちのくトレイルクラブ
同トレイルを歩く上で役立つ地点情報を満載。



B　震災リゲイン特製「猫の小林さん」キーホルダー 10名
本紙おなじみ、飯川雄大さんが描くキャラクターがキーホルダーに！色は選べませんのでご了承ください。



※2022年4月11日締切。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。また個人情報はこの発送以外に使用しません。

知って
おこう
―連載―

Presented by RQ災害教育センター

災害教育を知る旅

第３回・若者たちと災害教育

文＝塚原俊也（一般社団法人RQ災害教育センター）

RQ市民災害救援センター、東日本大震災でのボランティア活動

今回は私が2011年春から秋まで代表をしていた「RQ市民災害救援センター河北ボランティアセンター」で共に活動し、災害教育の現場で成長した若者のことを書きます。

あの夏、東北には日本中から、居ても立っても居られない多くの若者たちが被災地のために集いました。1000年に一度の大災害を目の当たりにし、被災者のために動いた若者たち。一方で、災害ボランティアとして活躍する中で彼ら自身に大きな学びや成長が起きていました。

20代後半の男性は関東で揺れを体験。関東でさえ命の危険を感じる揺れで、すぐ近くが震源だと思ったが実際は宮城県沖、そして津波の大災害をニュースで知ったそうです。これまで災害支援で動いたことはなかった彼でしたが、未曽有の大災害は彼の足を被災地へ向かわせました。初夏に被災地へ入った彼が見た光景は、発災後3か月ほどたった時期でも筆舌に尽くしがたい光景だったと感じたそうです。

災害教育という視点でどんな学びがあり今に繋がっているかも聞いてみました。一番印象的だったことは、自分より若い仲間たちの姿だったそうです。RQのメンバーとして、石巻市雄勝町の波板浜で活動していた彼の目に飛び込んできたのは、年齢や性別を問わず主体的に動く年下の現場リーダー達でした。これまでの生活で彼は主体的に行動するということはなかったそうです。その気づきが、彼を継続的に被災地へ向かわせるきっかけのひとつになりました。彼は茨木県常総市や岩手県雫石町での水害でも現地で活動しました。

それ以前はニート経験やアルバイト生活の日々を送っていた彼は、石巻で自然の猛威を目の当たりにしたと同時に、災害支援の現場からも多くのことを学びました。その後はRQの多くの仲間のバックボーンである自然学校や冒険教育の現場にも参加し、主体性や自ら一歩を踏み出し、チャレンジし続けることも学びました。現在は土木関係の仕事に就職し、ひとり親方として独立も果たし仕事を続けています。

RQ災害教育センターが、あえて「災害支援の現場で学ばせていただく」というのはこのあたりに意義があると思います。RQは誰でもボランティアに参加できるというコンセプトで、多くの大学生や青年たちを受け入れ、共に活動しました。上記の彼だけではなく多くの若者たちが被災地を励ましたと同時に彼ら自身が成長していく姿を何度も目の当たりにしました。

つかはら・としや
1980年神奈川県生まれ。一般社団法人RQ災害教育センター　メンバー。くりこま高原自然学校校長、OWLS(outdoor works & lifestyle)代表。

一般社団法人RQ災害教育センター
rq-center.jp

記憶を
受け継ぐ
―連載―

3.11伝承ロードを訪ねて

第４回・ユニークな震災遺構「潮目」①（岩手県大船渡市三陸町越喜来）

文＝多勢太一（一般社団法人陸前高田市観光物産協会 職員）

今までの考え方がガラッと変わるようなユニークな震災遺構があります。その名も「潮目」（しおめ）です。何がユニークなのか、そもそもどのような震災遺構なのか。今回は不思議な震災遺構である「潮目」についてご紹介します。

「潮目」は岩手県大船渡市三陸町の越喜来（おきらい）にある震災遺構です。潮目の場合は震災当時の状態をそのままを遺しているわけではなく、地震や津波で流された廃材を再利用して建てられており、掲示板に貼られた津波襲来時の写真は、震災当時の状況を生々しく伝えています。

しかし、ここで強調しておきたいのは、潮目の震災遺構としてのユニークさです。到着すると、まずその派手な外観に目を奪われることでしょう。外観は、黄色・オレンジ・青などカラフルに彩色され、海・手・花・太陽といったイラストが描かれています。また、館内を見渡すと「雑魚寝スペース」や「BBQコーナー」があり、壁には「潮目を訪れた旅人たちとの写真」が飾られています。潮目は、物言わぬ語り部と形容される多くの震災遺構とは性質が異なり、「人々の温かさ」を感じることができる唯一無二の震災遺構なのです。

では、なぜ潮目はこんなにも独創的なのでしょうか。館長の片山和一良さんは「プラスの震災遺構を残したかった」と、その理由を語ります。

「震災遺構ってどうしてもマイナスなイメージがあるけど、潮目は色んな人が関わってくれて、みんなの想いを繋いできたからこそ現在（いま）がある。海流がぶつかって多くの魚が集まる潮目という言葉の通り、十人十色の人生がこの『潮目』に集まり、交流して、最終的にはプラスな何かが生まれる。そんな場所を越喜来に作りたかったんだよね」

三陸沖の黒潮と親潮がぶつかる潮目のように、人が集う場所を作りたい。そんな片山さんの想いを具現化するかのように、「潮目」は、復興支援のボランティアや、日本一周に挑戦する旅人、みちのく潮風トレイルを歩くハイカーなど、多種多様な人生が集まる場になっています。

（続く）

カラフルな景観が目を引く「潮目」

たせ・たいち
千葉県船橋市生まれ。大学卒業後は都内の人材企業で法人営業の仕事に1年半従事。2020年9月に地域おこし協力隊として、岩手県陸前高田市に移住。現在は(一社)陸前高田市観光物産協会で「高田松原津波復興祈念公園パークガイド」や、同市における「みちのく潮風トレイル」の振興に携わる。

行って
みよう

潮目
岩手県大船渡市三陸町越喜来字肥ノ田30-10

3.11伝承ロードの詳細は▶
一般社団法人3.11伝承ロード推進機構
www.311densho.or.jp

震災リゲインプレスとは

東日本大震災の翌年、2012年創刊。震災をめぐる復興・支援・防減災の備えなど様々な情報をお届けする季刊フリーペーパー。創刊10年目を迎えたいま、改めて東北の情報を軸にした発信を目指して再スタートしました。
過去号閲覧や会員登録ができるウェブサイトもあります。shinsairegain.jp

ご意見、情報をお寄せください。記事の書き手の方も募集しています！

特定非営利活動法人 震災リゲイン『震災リゲインプレス』編集部宛　info@shinsairegain.jp
〒106-0044　東京都港区東麻布2-28-6　03-3584-3430　FAX 03-3560-2047

NPO法人　理事（五十音順）：相澤久美、内田伸一、大場健一、鬼本英太郎、日下部泰祐、佐々木豊志、関口威人、高木伸哉、田北雅裕、福井一朗｜監事：渡部宏幸｜編集：相澤久美、内田伸一｜デザイン：八木直子

読み・聞き あれこれ

書評｜民間主体の産業再生を考える１冊

文＝佐々木晶二

この本は、宮城県牡鹿郡女川町の東日本大震災からの復興プロセスを、地元民間企業者を中心にした復興連絡協議会（FRK）を軸に述べています。

一般的にいって復興プロセスには、「行政主体の基盤整備」「民間企業主体の産業再生」「住民主体の住まい再建」があります。この本は、民間企業主体の産業再生を中心に語っています。行政主体の基盤整備については、産業を支えるという観点から述べられています。

女川町の産業再生は、東日本大震災の復興の中では成功していると言われていますが、この本から成功の決め手を、各種の事業や分野に横断的な視点から私なりに整理してみます。

第一は、**「世代交代」**。商工会長が震災一月後に「これからのまちづくりは30代、40代の若者に託す、自分たち還暦以上の世代は口だししない」という世代交代宣言を出して、実際にFRKの運営も若者に任せたとのことです。ちなみに、須田善明町長も東日本大震災時は宮城県議で、震災後に町政を任されているので、世代交代の例かもしれません。

年配者の経験は同じタイプの出来事には比較的適切に対応できますが、前代未聞の復興に対して年配者が身を引くというのとても大事な決断になったと思います。

第二は、**「東京資本でなく地元資本」**。「知恵はよそものから借りてもやるのは地元」。がれきの中間処理や災害公営住宅についても、地元建設業者がグループをつくって地元で受けて地元にお金が落ちるようにしています。また、駅前商店街の整備には、木下斉さんや岡崎正信さんという地方活性化のプロの指導を受けていますが、同時に阿部喜英さん（一面参照）をはじめとする地元商業者がまちづくり会社をつくって、しっかりと地元主導、民間主導で商店街の整備を実現しています。

第三は、**「基盤は柔軟な変更とデザイン重視」**。女川町の「復興まちづくりデザイン会議」では外部専門家を招き、「海を見ながら暮らす」というコンセプトのもと、大胆に造成計画を変更するとともに、商店街整備のためにシンボルとなるレンガみち周辺に町有地を集めるなど、基盤整備の先を見通した計画を作っています。

Kappo特別編集
女川 復幸の教科書：復興8年の記録と女川の過去・現在・未来
『女川　復幸の教科書』編集委員会（編著）　プレスアート刊
刊行日：2019/3/15

ちなみに、こういうとすべてが順風満帆のようですが、この本では語られていない課題として、住まいの再建があります。女川町は震災前の人口1万人が現在は4割減の6千人台。住まいの再建はこれからです。みなさんにも、この本を読んで、是非女川町を応援してほしいと思います。

この本の最後は、美味しい食事をだすお店、豊かな自然、トレーラーハウスの宿泊施設など観光案内のようです。新型コロナウイルス感染症が収まったら、この本を片手に女川町にいって楽しんで、お金も使ってきましょう。それが一番の応援です。

支え合うために －連載－

災害支援の現場から伝えたいこと

第３回・専門性ある支援者（プロボノ）とボランティアの連携・協働

文＝園崎秀治（オフィス園崎）

2016年に起きた「鳥取中部地震」では最大震度6弱、死者が出なかったのですが、家屋の屋根瓦の破損を中心に、1万5千棟以上が一部損壊の被害を受けました。屋根瓦が破損すると、雨漏りを防がないと住宅は住めない状況になってしまいます。応急措置として行政がブルーシートを住民に配布したのですが、屋根の上でブルーシートをかける作業は危険であり、普通の人はできません。そのとき災害ボランティアセンターに寄せられた住民からのニーズの9割以上は「屋根にブルーシートをかけてほしい」でした。

しかし、災害ボランティアセンターに活動をしようと集まった一般の個人ボランティアに屋根に登る技術はなく、災害ボランティアセンターとしてもそのような危険な作業に送り出すことはできません。それでは9割もの要望をすべて受けられないセンターで良いのか。そうはいきません。そこで行われたのが、協働による作業の役割分担です。建築士会や建設業協会、消防関係者などとの連携により、何とかそのニーズに応える工夫をして乗り切ったのでした。

被災地ではこの他にも床下に潜る、重機を使って作業を行うなど、一般のボランティアでは対応が困難なニーズがいくつもあります。その時に協働していくのが専門性をもった支援者です。技術を持ったボランティアを「プロボノ」と呼んだりします。

こういった被災者からの支援の要請が集まる災害ボランティアセンターと、技術を持ったプロボノとの連携は年々進化して拡がっています。

分野としては、ICT（情報通信技術）を専門とする人がボランティア活動や災害ボランティアセンター運営における情報発信や情報処理に関わることなども進んでおり、このように災害時にボランティアによる支援の幅は拡がってきています。

自治体は、インフラ復旧にあたって様々な企業などと協定を結んで「公助」の支援体制を構築していますが、公助が手を出せない個人宅への支援等については、民間（ボランティア）が対応せざるを得ません。そこでの多様なニーズに応えていくためにも、プロボノとして支援に関わる人が増えることが重要ですが、課題としては支援者が旅費から作業経費まで持ち出しで支援をすることの限界などが挙げられます。プロボノとして支援に関われる方々が持続可能な活動を行えるように、財政的支援をはじめとする環境整備を行っていくことが重要です。

避難所への医療・保健・福祉の専門職派遣などは、災害時に公的なお金が入り支援体制が徐々に構築されつつあります。被災者の復旧・復興を支える専門性のある支援者がより支援活動に関われるような施策が、今後より一層求められています。

そのざき・しゅうじ
オフィス園崎代表。27年勤務した全国社会福祉協議会を2021年に退職、独立。多様な災害支援関係者との支援体制構築、防災・減災活動や、ボランティア・NPO・福祉専門職等による支援に関わり続ける。

www.officesonozaki.net

NPOの会員になる

あなたの力を貸してください 震災リゲインNPO会員募集！

NPO法人震災リゲインは、活動に賛同してくださる会員を募集しています。会費は各地への『震災リゲインプレス』送料等に充当させていただき、会員の皆様にも同紙をお届けします。周囲の人に手渡し読んでもらうことで、みんなで災害への備えを促進し、復興過程の被災地を支える活動に繋げましょう。各種ご質問は下記へ。
03-3584-3430　info@shinsairegain.jp

ご入会は⇒ shinsairegain.jp

会費は賛助会員／正会員 一口250円／月から、団体会員 一口2,500円／月から。詳細は上記サイトから「会員登録・寄付」をクリック。

【ご寄付のお願い】活動継続のためのご寄付も随時受け付けています。
ゆうちょ銀行　記号番号00160-6-387514　口座名：トクヒ）シンサイリゲイン
※他行からのお振込：店名　〇一九（ゼロイチキュウ）店名019 当座0387514

震災リゲインプレスは以下の協賛により発行しています。

Vision More vision, More success. 株式会社ビジョン
FREEing 株式会社FREEing www.freeing.co.jp
TOSMAX TOSMAX株式会社
IDD 東陽IDDセンター株式会社